

【論文要旨】

P・F・ドラッカー

——マネジメント思想の源流と展望

井坂康志

本論文の目的は、P・F・ドラッカー（Peter Ferdinand Drucker, 1909-2005）によるマネジメントがいかなる思想的契機によって養われ、生成を遂げてきたかを解明することにある。ドラッカーが残した業績はマネジメントに限定されることなく多岐にわたっている。そのなかで、経営学や経営実践の側から個別的に研究が行われてきた。その思想的全体像や、主要著作に継承される世界観の核、もしくはヴィジョンの中枢にある祖型的な思惑から、マネジメントをはじめ著作全般に通底する基本的視座や展望上の視軸に注目するものは少なかった。

その理由としては、ドラッカーが残した著作の多くが現実世界の観察という形式をとっており、学問的体系化や理論化を目指したというよりも、観察内容に依拠した現実的応答として発表されたためでもあったと考えられる。ドラッカーの職業が、大学での研究者であったとともに、コンサルタント、書き手であったのは上記の点を明瞭に表現している。したがって本論文では著作群、とりわけヨーロッパ期になされた〈初期〉著作に由来する意図の一貫性を念頭に置きながらも、ドラッカーの基本的視座を包括的に明らかにしようと試みている。そこには、ドラッカーの主たる知的領野として観察しうるマネジメントと社会生態学への架橋という意味合いも込められている。

未着手の領域として、筆者の問題意識を共約するうえで、本論文は三部構成をとっている。それぞれ3点の課題が、各部での考察内容に対応している。

第1の課題として、人、思想、業績を総合的にとらえる研究がまだ質的に十分な深度に達していない現状がある。ドラッカーによるマネジメント研究の起点を1946年からとするならば、95年におよぶ人生の中で、マネジメント学者としての活動期間に比重があるのはやむをえない。だが、かりにヴィジョンを根に、思想を幹に、言論を枝に、コンセプトを葉や実になぞらえるなら、それら全体を包括的に論ずるうえでの視座を獲得しえなければ、企みの底流を十分に把握することはできないのは論を待たない。そのためには、ドラッカーに内在する体験、価値観、倫理観、美意識などの固有の精神領域にも大胆に踏み込み、理説との有意性を読み解いていく必要がある。そのことが、埋められることのなかった知的懸隔に橋を架ける一助ともなりうるであろう（「第I部 時代観察と〈初期〉言論」）。

第2の課題として、青年期の言動から根底的にとらえる見方は、1970年代に事実上開かれたと考えられるが、研究の本流を形成するまでにはいたらなかった。したがって、ドラッカーの思想的機縁をその知的アプローチの観点から検討するにあたっては、今一度、

言論人として歩ましめた特有の視座について立ち戻り、考察がなされる必要がある。マネジメントに伴う言説もまた、その精神活動の賜物であり、滋養を豊富に受け取っているためである（「第Ⅱ部 基礎的視座の形成と展開」）。

第3の課題として、ドラッカーの開拓した知の地平が現代にあつていかなる意味を有するかとの問題意識がある。残された著作物の多くは、理論的実証性がそもそも意図されているようには見えず、現実への観察の形式をとるものがほとんどである。しかも、観察対象はあまりに多様であり、生きた時代において、書物の耽読や人との出会いを通じた内的対話の結果紡ぎ出されてもいる。その内的対話と交流によってもたらされた現代的インプリケーションの様態を主として取り扱っている（「第Ⅲ部 内的対話と交流」）。

結論として、序章で提示された3つの課題に照らし、次のように総括している。

第1に、業績全般にあつて、企業や組織等の経営への関心は否定しえないが、ナチズムへの異議申し立てに起源を有するドラッカーにおける言論上の意図の問題は、方法的前提の課題、あるいは観察上の視座からしても譲りえない定点であつた。ドラッカーが第二次大戦後、マネジメントに伴う一連の言説に踏み出していった後も、上記の問題意識は最後まで主要な関心を構成する中枢的契機であり、主題たり続けている。なぜなら、産業社会の中心機関と見定められた企業もまた、自由にして機能する社会の展開を促す理念構造の中ではじめて可能性を具現しうるためである。すなわち、企業が社会的、あるいは政治的機関として、単なる経済的私益追求に用いられるのではなく、むしろ産業社会を構成する個の実存や成長を促しつつ、しかも組織の協働をもって創造的な自由社会の形成を伴う新たな公的世界への積極的参画を期待される点に理念的存在を見出しうる。そして、企業を理念的存在として理解するとき、全体主義やイデオロギー的な脅威から自由社会を内側から防護しつつ克服しうるだけの正統性を伴う社会の可能性が開かれるであろう。

第2として、起点であるヨーロッパ時代の所見に立ち戻るならば、英米流自由主義と保守主義等の伝統に深く定位された、政治や社会、個等への思想系譜に基づいて、アメリカ産業社会を観察している。そこでは、ある種の思想的アマルガムが形成されており、種々のアプローチを基底とした固有のヴィジョンを看取しうるし、それらを踏まえ、第二次大戦後の公的世界再建を意図した知的主題としてマネジメントが提示されている。しかし、マネジメントに限らず、ドラッカーによって提示された言説は、地域的、文化的、歴史的に多様な帰属性を伴う思想によるユニークな結合でありながらも、それ自体無定型な焼き直しではない。むしろドラッカーは自らが体験してきた、漂白性やマージナル性などから、マクルーハンの言う世界市民としての新しいアイデンティティを表現しうる知的体系を意識的に研ぎ上げてきた。自由や正統性はもちろんのこと、保守主義、社会生態学、日本美術といった、諸種の問題やアプローチが抽象的に論じられるのではなく、現実との折衝と研磨を経て展開されているのはその一つの表れである。

第3に、ドラッカーによって観察された知の地平が、現代にあつて要請される知識社会の今日的課題への応答であつた点をも示している。ドラッカーの言説は、一元的強圧への

抵抗を基軸としながらも、同時に脱近代とそれに伴う新たな世界認識を志向してもいる。現代は大企業システムや雇用制度、近代国家や貨幣制度などが揺らぎにさらされており、それらへの応答としてドラッカーの言説を〈初期〉の意図との関連で探索するならば、一元的な権力に伴う他律的關係性から脱し、むしろ個が市民としての自律性を備えた新たな知識社会のグランドデザインに着目した論者として改めて評価すべき論者であることも見えてくる。その中で、最終章のマクルーハンとの対話において記述するように、21世紀の知識社会としての「ネクスト・ソサエティ」における主題として、知識がユニークな資本として個のアイデンティティの中枢を形成し、個の自由と責任が中心となるなかで、上からの一元的な権力形態に代わり知識ある個による下からの権力創出に依拠しつつ、知識労働者の協力と協働による社会創造をも示唆されていると見る事が可能である。

上記の考察を整理するならば、マネジメントを内包するドラッカーの言説全体においては、数多くの基底的概念やアプローチの投影を確認しうるし、固有のしかたで思想や関心、同時代人との対話による考察等を包括的に内に蔵しつつ、それ自体が尽きせぬ可能性を湛えている。そして、上記3点いずれをも共約する要因として、20世紀を適切な転換に失敗した「浪費された世紀」と見なし、全体主義をはじめとする一元主義的イデオロギーにおける暴威と欺瞞への激しい怒りと断固たる異議申し立てへの意思が、マネジメントをはじめとするドラッカーの全言説全般をめぐる思想的底流をなしている点を本論は常に強調している。その点にあっては、ドラッカーの生きたヨーロッパ期から第二次大戦直後のアメリカ期の経験の中で、時代環境から受け取った認識とともに、個としての内面で進行する経験や価値観や美意識等の精神的諸相にまで大胆に踏み込んだ本論の解釈は、従来重ねられてきたドラッカー研究の中では比較的新規の視点を提示している。同時にドラッカーの基底的な意図を未来の社会的構想の中に創造的に投射しつつ生かしていくうえでの期待をも内包しつつ、新たに展開していく「未完の体系」としてのマネジメント像を浮き彫りにする上でも、現代及び未来の知的状況へのドラッカーによる一定の思想的貢献が示されてもいる。